

環境三社会(気候変動・自然資本・資源循環)に関する開示 への対応について

—機関投資家としての生命保険会社の視点—

2024年10月18日

明治安田生命 鈴木直行

機関投資家の視点①開示内容は時間をかけて高度化

- 生命保険会社は、サステナビリティ開示を基に投融資をおこなう「利用者」の立場と、事業会社として開示を作成する「作成者」両方の立場
- 環境三社会（気候変動・自然資本・資源循環）に関する統合的な開示は黎明期
- 機関投資家としては、幅広い企業への投融資を行っているため、事業会社における開示の裾野が拡大していくことを期待

機関投資家がサステナビリティ開示を利用する際の2つのポイント

- ①そもそもサステナビリティ情報が開示されている
- ②経営の実態を映す開示となっている

SSBJ基準の公開草案に対して提出した生命保険協会意見（抜粋）

サステナビリティ開示の裾野を広げ、開示実務を蓄積するという観点からすれば、SSBJ基準に則った任意開示を推進することは、サステナビリティ開示の黎明期において特に重要であると考えられる。

機関投資家の視点②協働エンゲージメントを通じた開示充実の後押し

- 最初から質の高い開示を期待するというよりも、まずは開示可能な項目から順次開示が進み、投融資先とのエンゲージメントを深める契機となることを期待
- 2017年度より、株式市場の活性化と持続可能な社会の実現を企図して生命保険協会内に設置された「スチュワードシップ活動WG」参加各社は、協働で企業に課題提起する「協働エンゲージメント」を実施

